

209 肺癌剖検における特発性間質性肺炎合併例の臨床病理学的検討

天理よろづ相談所病院 呼吸器内科¹, 病理²
 ○南部静洋¹, 柚木由浩¹, 三野真里¹, 弓場吉哲¹, 富井啓介¹
 田口善夫¹, 郡 義明¹, 種田和清¹, 岩田猛邦¹,
 小橋陽一郎², 市島國雄²

【目的】肺癌と特発性間質性肺炎（以下UIP）の合併は頻度が高く予後不良な症例が多い。今回我々は肺癌剖検症例についてUIP合併肺癌の臨床病理学的検討を行なった。

【対象及び方法】1966年以降1987年までの肺癌剖検399例の胸部レ線、臨床経過、剖検肺病理所見より少なくとも肺癌診断時にUIP合併が疑われた症例について検討した。

【結果】肺癌総剖検におけるUIP合併例は17例(4.3%)であり、男性15例、女性2例、平均年齢69.8歳、全例が喫煙者でB.I. 800以上の重喫煙者が13例であった。肺癌組織型は扁平上皮癌5例、小細胞癌5例、腺癌4例、大細胞癌3例、その他2例で肺多発癌が2例含まれていた。原発部位では右上葉6例、右中葉1例、右下葉3例、左上葉5例、左下葉3例であった。肺癌とUIPの合併時期については肺癌診断時にUIPを合併した症例が10例、胸部レ線よりUIPを先行した症例は7例で、うち3例は剖検時に肺癌が判明した。UIP合併肺癌の肺癌診断後の平均予後は6.6カ月であり、放射線治療を施行した9例中6例では経過中UIPの増悪により呼吸不全死した。

【考案】肺癌とUIPの合併は男性、高齢者、重喫煙者に多くこうしたhigh risk患者での肺癌、UIPの早期診断と放射線治療経過に認められるUIPの増悪に充分な検討をしていくことが重要な問題と考えられた。

211

肺癌患者末梢血中に存在する血栓誘発因子

九州大学医学部胸部疾患研究施設¹、福岡大学第二内科²、九州癌センター呼吸器科³
 ○林真一郎¹、矢川克郎¹、中西真之²、緒方賢一¹、
 萩野英夫¹、村西寿一¹、一ノ瀬幸人³、原信之³、大田満夫³、重松信昭¹

目的：我々は進行期肺癌患者の末梢血中に血栓誘発因子が存在することを既に報告している。今回さらに肺癌患者臨床像との関連につき検討を加えた。

対象および方法：対象は九州大学附属病院呼吸器科に入院した原発性肺癌患者73名で、全例男性である。女性は性ホルモンと血液凝固系の間の関連性が考えられるため除外した。

血栓誘発因子を有する患者より得られた血漿・血清をマウスに静脈内投与すると、肺に多発性血栓が生じ、それにより同動物は数分以内に死に至る。対象となる肺癌患者の血清をマウスに投与した場合の反応で血栓誘発因子の有無を測定した。

結果および考察：原発性肺癌患者の45%に同因子を認めた。病期別にみるとI・II期患者では6%のみが陽性であったのに対しIII期60%・IV期54%の陽性率であった。組織型別にはそれぞれ類表皮癌59%腺癌50%小細胞癌38%大細胞癌25%の陽性率であった。種々の生化学的考察から同因子は組織トロンボプラスチンないしはその類似物質と考えられた。同因子陽性者は血液凝固亢進所見を伴う場合が多く、担癌患者に見られる血液凝固異常や血栓症の発症に同因子が関与している事を示唆するものと思われた。

210 肺癌患者における凝固線溶系異常の発生因子の検討

浜松医科大学第二内科¹、焼津市立総合病院呼吸器科²
 ○永山雅晴¹、佐藤篤彦¹、立花昭生²

【目的】担癌状態における凝固線溶系異常の報告は多いが、今回、肺癌症例の入院時の凝固線溶能を測定し、比較検討した。更にDIC(+)の併発群とDIC(-)群に分け、DICの発生因子についても検討を加えた。

【対象及び方法】対象は昭和59年～昭和62年の肺癌入院患者58例。DIC発生は5例に認められたが、組織型は、腺癌3例、扁平上皮癌と小細胞癌の各1例で、病期は、IV期4例、III期1例。各々の症例の入院時におけるPT、APTT、FIBG、FDP、PLTの測定値を比較検討した。

【結果】APTTは肺癌患者群で、有意に短縮し、FIBG、PLTは、肺癌患者群で有意に上昇していた。DIC(+)群とDIC(-)群間ではPT、APTT、FDPに有意差はなく、FIBG、PLTはDIC(+)群で有意に上昇していた。

【考察】担癌状態では腫瘍局所の凝固線溶因子消費増大する為、代償性に各々の活性が亢進することが報告されており、今回の検討と一致するものであった。

DIC(+)群におけるFIBG、PLTの上昇は広範な腫瘍のフィブリンネット形成、および血栓形成を示唆するものと思われた。なお、DIC(+)群の5例中4例は、肺炎、呼吸不全を合併していることから、DICの発生誘因因子としての感染症の発生状況について、特に免疫能の点からも、検討を加えたので報告する。

212

肺癌症例における血小板粘着蛋白の動態(第一報)

関西医大第一内科
 ○曾我哲司、袋井 力、柳父睦政、野村昌作、米津精文、安永幸二郎

目的：血小板は血管内皮の障害などにより刺激が加わると粘着、放出、凝集という一連の活性化が招来される。その時に血小板粘着蛋白が重要な働きをなすとされているが、今回我々は肺癌症例においてフィブリノーゲン(Fbg)、フィブロネクチン(Fn)、トロンボスpongin(TSP)などの粘着蛋白がどの程度血小板に結合しているのかを測定し、組織分類並びに進展度との関係について検討した。

対象：未治療の肺癌13例である。

方法：採取後洗浄した血小板を1%パラホルムアルデヒドにて固定し、フローサイトメトリーにて血小板膜表面に結合しているFbg、Fn、TSPを測定した。なお7名の健常者を正常対照とした。

		n	Fbg	Fn	TSP
血 小 結 合 率 の み	扁平上皮癌 III A	4	50.5±28.2	43.6±29.3	47.3±16.7
	III B	4	54.6±13.2	42.2±5.3	47.3±4.2
	IV	1	16.9	14.9	14.7
	腺癌 III A	1	36.9	9.6	18.1
	IV	2	22.6±0.1	22.8±2.8	14.2±3.8
	小細胞癌 III B	1	43.0	41.0	36.1
対照	-	35.6±5.4	34.9±3.6	21.1±9.5	

考察：扁平上皮癌のIII A、III Bでは対照に比しFbg、Fn、TSPとも高い血小板への結合率を示し、血小板を活性化させる何らかの因子が血漿中に存在していることが示唆された。今後さらに症例を重ね検討していく予定である。